

天守物語

泉鏡花

青空文庫

時 不詳。ただし封建時代——晩秋。日没前より深更にいたる。

所 播州姫路。白鷺城の天守、第五重。

登場人物

天守夫人、富姫。（打見は二七七八）岩代国猪苗代、亀の城、亀姫。（二十ばかり）姫川図書之助。（わかき鷹匠）小田原修理。山隅九平。（ともに姫路城主武田播磨守家臣）十文字ヶ原、朱の盤坊。茅野ヶ原の舌長姥。（ともに亀姫の眷属）近江之丞桃六。（工人）桔梗。萩。葛。女郎花。撫子。（いずれも富姫の侍女）薄。（おなじく奥女中）女の童、禿、五人。武士、討手、大勢。

舞台。天守の五重。左右に柱、向つて三方を廻廊下のごとく余して、一面に高く高麗べりの畳を敷く。紅の鼓の緒、処々に蝶結びして一条、これを欄干のごとく取りまわして柱に渡す。おなじ鼓の緒のひかえづなにて、向つて右、廻廊の奥に階子設く。階子は天井に高く通ず。左の方廻廊の奥に、また階子の上下の口あり。奥の正面、及び右なる廻廊の半ばより厚き壁にて、広き矢狭間、狭間を設く。外面は山岳の遠見、秋の雲。壁に出入りの扉あり。鼓の緒の欄干外、左の一方、棟、葺、並びに樹立の梢を見ず。正面おなじく森々たる樹木の梢。

女のわらわ 女童三人——合唱——

ここはどここの細道じや、細道じや、

天神様の細道じや、細道じや。

——うたいつつ幕開く——

侍女五人。桔梗、女郎花、萩、葛、撫子。各名にそぐえる姿、鼓の緒の欄干に、あるいは立ち、あるいは坐て、手に手に五色の絹糸を巻きたる糸柱に、金、銀色の細き棹を通し、糸を松杉の高き梢を潜らして、釣の姿す。

女童三人は、緋ひのきつけ、唄うたいつづく。——冴さえて且かつつ寂さびしき声。

少し通して下くださんせ、下くださんせ。

ごようのないもな通とほしません、通とほしません。

天神様へ願ねが掛けに、願ねが掛けに。

通とほらんせ、通とほらんせ。

唄うたいつつその遊あそ戯びをす。

薄すすき、天守の壁の裡うちより出でづ。壁の一劃かくはあたかも扉のごとく、自由じゆうに開ひらく、この婦おんなや

や年としかさ。鼈べつこう甲こうの突つ通とほし、御殿奥女中のこしらえ。

薄ほおずき 鬼灯おにとうさん、蜻蛉とんぼさん。

女童一 ああい。

薄しずか 静しずかになさいよ、お掃除が済すまんだばかりだから。

女童二 あの、釣つりを見みましようね。

女童三 そうね。

いたいけに領うなずきあいつつ、侍女等の中に、はらはらと袖そでを交まじう。

薄あたりみまわ (四辺あたりみまわをす) これは、まあ、まことに、いい見晴みはしでございますね。

葛 あの、猪苗代のお姫様がお遊びにおいででございますから。

桔梗 お鬱陶うつとしかろうと思ひまして。それには、申分のございませぬお日和でございますし、遠山はもう、もみじいたしましたから。

女郎花 矢狭間も、物見も、お目触りな、泥や、鉄の、重くるしい、外そとがこい 囲は、ちよつと取払つておきました。

薄 成程、成程、よくおなまけ遊ばす方たちにしては、感心にお氣のつきましたことございます。

桔梗 あれ、人ぎきの悪いことを。——いつ私たちがなまけましたえ。

薄 まあ、そうお言ひの口の下で、何をしておいでだろう。二階から目薬とやらではあるまいし、お天守の五重から釣をするものがありますかえ。天の川は芝を流れはいたしません。富姫様が、よそへお出掛け遊ばして、いくら間ひまがあると申したつて、串じょうだん 戯ではありませぬ。

撫子 いえ、魚を釣るのではございませぬ。

桔梗 旦那様の御前おまえに、ちようど活いけるのがございませぬから、皆みんなで取つて差上げようよと存じまして、花を……あの、秋草を釣りますのでございますよ。

薄 花を、秋草をえ。はて、これは珍しいことを承ります。そして何かい、釣れますかえ。
めのわらわ 女童の一人の肩に、袖でつかまつて差さ覗のぞく。

桔梗 ええ、釣れますとも、もつとも、新発明でございます。

薄 高慢なことをお言いでない。——が、つきましては、念のために伺いますが、お用いになります。……餌えさの儀でござんすがね。

撫子 はい、それは白露でございますわ。

葛 千草八千草秋草が、それはそれは、今頃は、露を沢山たん欲としがるのでございますよ。刻限も七つ時、まだ夕露も夜露もないのでございますもの。(隣を視みる) 御覧なさいまし、

女郎花さんは、もう、あんなにお釣りなさいました。

薄 ああ、ほんにねえ。まったく草花が釣れるとなれば、さて、これは静しずかにして拜見をいたしましょう。釣をするのに饒舌しゃべつては悪いと云うから。……一番いちばんだまつておとなしい女郎花さんがよく釣つた、争われないものじやないかね。

女郎花 いいえ、お魚とは違いますから、声を出しても、唄いまして構かまいません。——ただ、風が騒さわぐと下い可けませんわ。……餌えさの露が、ぱらぱらこぼれてしまいますから。あ、釣れました。

薄 お見事。

と云う時、女郎花、棹さおながらくるくると柀を巻戻す、糸につれて秋草、欄干かたわらに上り来る。さきに傍かたわらに置きたる花とともに、女童の手に渡す。

桔梗 釣れました。(おなじく糸を巻戻す。)

萩 あれ、私も……

花につれて、黄と、白、紫の胡蝶こちょうの群むれ、ひらひらと舞上る。

葛 それそれ私も——まあ、しおらしい。

薄 桔梗さん、棹をお貸しな、私も釣ろう、まことに感心、おつだことねえ。

女郎花 お待ち遊ばせ、大層風が出て参りました、餌が糸にとまりますまい。

薄 意地の悪い、急に激しい風になったよ。

萩 ああ、内うちぐるわ廊の秋草が、美しい波を打ちます。

桔梗 そう云ううちに、色もかくれて、薄すすきばかりが真まっしろ白に、水のように流れて来ました。

葛 空は黒くろくも雲が走りますよ。

薄 先刻さつぎから、野も山も、不思議に暗いと思っていた、これは酷ひどい降りになりますね。

舞台暗くなる、電光ひらめ閃く。

撫子 夫人は、どこへおいで遊ばしたのでございますえ。早くお帰り遊ばせば可うござ
いますね。

薄 平時のよういっもに、どこへとも何ともおつしやらないで、ふいとお出ましになつたもの。

菼 お迎えにも参られませぬえ。

薄 お客様、亀姫様のおいでの時刻を、それでも御含みでいらつしやるから、ほどなくお
帰りでござんしよう。——皆さんが、御心入れの御馳走、何、秋草を、早くお供えなさ
るが可よいね。

女郎花 それこそ露の散らぬ間に。——

正面奥の中央、丸柱かたわらの傍よろいびつに、鎧櫃よろいびつを据えて、上に、金色こんじきまなこの眼、白銀しろがねの牙きば、色は藍あゐ
のごとき獅子頭ししがしら、萌黄錦もえぎにしきの母衣ほろ、朱の渦まきたる尾を装いたるまま、莊重にこれ
を据えたり。

——侍女等、女童とともにその前まへに行き、跪ひざまずきて、手に手に秋草を花籠はなごに挿す。色の
その美しき蝶ひとしの群、齊ひとしく飛連ひれてあたりあたりに舞う。雷らいやや聞きゆ。雨あめ来きたる。

薄 (薄暗はくき中に) 御覽、両眼くわく赫くわく耀ようと、牙も動くように見えること。

桔梗 花も胡蝶ちようもお氣に入いつて、お嬉しいんでございましょう。

時に閃電す。光の裡を、衝と流れて、胡蝶の彼処に流るる処、ほとんど天井を貫きたる高き天守の棟に通ずる階子。——侍女等、飛ぶ蝶の行方につれて、ともに其方に目を注ぐ。

女郎花 あれ、夫人がお帰りでございますよ。

はらはらとその壇の許に、振袖、詰袖、揃って手をつく。階子の上より、まず水色の衣の褙、裳を引く。すぐに蓑を被ぎたる姿見ゆ。長なす黒髪、片手に竹笠、半ば面を蔽いたる、美しく気高き貴女、天守夫人、富姫。

夫人（その姿に舞い継る蝶々の三つ二つを、蓑を開いて片袖に受く）出迎えかい、御苦労だね。（蝶に云う。）

——お帰り遊ばせ、——お帰り遊ばせ——侍女等、口々に言迎う。——

夫人 時々、ふいと気まかせに、野分のような出歩行きを、……

ハタと竹笠を落す。女郎花、これを受け取る。貴女の面、凄きばかり白く臙長けたり。

露も散らさぬお前たち、花の姿に気の毒だね。（下りかかりて壇に弱腰、廊下に裳。）

薄 勿体ないことを御意遊ばす。——まあ、お前様、あんなものを召しまして。

夫人 似合ったかい。

薄 なおその上に、御前様、お痩せ遊ばしておがまれます。柳よりもお優しい、すらすらと雨の刈萱を、お被け遊ばしたようにござります。

夫人 嘘ばかり。小山田の、案山子に借りて来たのだものを。

薄 いいえ、それでも貴女がめしますと、玉、白銀、揺の糸の、鎧のようにもおがまれます。

夫人 賞められてちつと重くなつた。(蓑を脱ぐ) 取っておくれ。

撫子、立ち、うけて欄干にひらりと掛く。

蝶の数、その蓑に翼を憩う。……夫人、獅子頭に会釈しつつ、座に、褥に着く。脇息。

侍女たちかしづく。

少し草臥れましたよ。……お亀様はまだお見えではなかつたろうね。

薄 はい、お姫様は、やがてお入りでござりましょう。それにつけても、お前様おかえりを、お待ち申上げました。——そしてまあ、いずれへお越し遊ばしました。

夫人 夜叉ヶ池まで参つたよ。

薄 おお、越前国大野郡、人跡絶えました山奥の。

萩 あの、夜叉ヶ池まで。

桔梗 お遊びに。

夫人 まあ、遊びと言えは遊びだけれども、大池のぬしのお雪様に、ちつと……頼みたい事があつて。

薄 私はじめ、ここに居ります、誰ぞお使いをいたしますもの、御自分おいで遊ばして、何と、雨にお逢いなさいましてさ。

夫人 その雨を頼みに行きまして。——今日はね、この姫路の城……ここから視れば長屋だが、……長屋の主人、それ、播磨守が、秋の野山へ鷹狩に、大勢で出掛けました。皆知つておいでだろう。空は高し、渡鳥、色鳥の鳴く音は嬉しいが、田畑と言わず駈廻って、きやつきやつと飛騒ぐ、知行とりども人間の大声は騒がしい。まだ、それも鷹ばかりなら我慢もする。近頃は不作法な、弓矢、鉄砲で荒立つから、うるささもうるさしさ。何よりお前、私のお客、この大空の霧を渡つて輿でおいでのお亀様にも、途中失礼だと思つたから、雨風と、はた神で、鷹狩の行列を追崩す。——あの、それを、夜叉ヶ池のお雪様にお頼み申しに参つたのだよ。

薄 道理こそ時ならぬ、急な雨と存じました。

夫人 この辺は雨だけかい。それは、ほんの吹降りの余波であろう。鷹狩が遠出をした、姫路野の一里塚のあたりをお見な。暗夜のような黒い雲、眩いばかりの電光、可
 恐い雷も降りました。鷹狩の連中は、曠野の、塚の印の松の根に、濡に寄つた鮎のよ
 うに、うようよ集つて、あぶあぶして、あやい笠が泳ぐやら、陣羽織が流れるやら。大
 小をさしたものが、ちつとは雨にも濡れたが可い。慌てる紋は泡沫のよう。野袴の裾
 を端折つて、灸のあとを出すのがある。おお、おかしい。(微笑む) 粟粒を一つ二つ
 と算えて拾う雀でも、俄雨には容子が可い。五百石、三百石、千石一人で食むもの
 が、その笑止さと言つてはない。おかしいやら、気の毒やら、ねえ、お前。

薄 はい。

夫人 私はね、群鷺ヶ峰の山の端に、掛稻を楯にして、戻道で、そつと立つて視
 めていた。そこには昼の月があつて、雁金のように(その水色の袖を圧う)その袖に
 影が映つた。影が、結んだ玉ずさのようにも見えた。——夜叉ヶ池のお雪様は、激いな
 かにお床しい、野はその黒雲、尾上は瑠璃、皆、あの方のお計らい。それでも鷹狩の
 足も腰も留めさせずに、大風と大雨で、城まで追返しておくれの約束。鷹狩たちが遠く
 から、松を離れて、その曠野を、黒雲の走る下に、泥川のように流れてくるに従つて、

追手の風の横吹。私が見ていたあたりへも、一村雨颯とかかったから、歌も読まずに蓑をかりて、案山子の笠をさして来ました。ああ、その蜻蛉と鬼灯たち、小児に持たして後ほどに返しましょう。

薄 何の、それには及びますまいと存じます。

夫人 いえいえ、農家のものは大切だから、等閑にはなりません。

薄 その儀は畏りました。お前様、まあ、それよりも、おめしかえを遊ばし、おめしものが濡れまして、お気味が悪うござりましょう。

夫人 おかげで濡れはしなかつた。気味の悪い事もないけれど、隔てぬ中の女同士も、お亀様に、このままでは失礼だろう。（立つ）着換えましようか。

女郎花 ついでに、お髪も、夫人様

夫人 ああ、あげてもらおうよ。

夫人に続いて、一同、壁の扉に隠る。女童のこりて、合唱す――

ここはどここの細道じや、細道じや。

天神様の細道じや、細道じや。

時に棟に通ずる件の階子を棟よりして入来る、岩代国麻耶郡猪苗代の城、千

畳敷の主、亀姫の供頭、朱の盤坊、大山伏の扮装、頭に犀のごとき角一つあり、
 眼円かに面の色朱よりも赤く、手と脚、瓜に似て青し。白布にて蔽うたる一個の小
 桶を小脇に、柱をめぐりて、内を覗き、女童の戯るるを視つつ破顔して笑う
 朱の盤 かちかちかちかち。

齒を嚙鳴らす音をさす。女童等、走り近く時、面を差寄せ、大口開く。

もおう！（獣の吠ゆる真似して威す。）

女童一 可厭な、小父さん。

女童二 可恐くはありませんよ。

朱の盤 だだだだだ。 （濁れる笑）いや、さすがは姫路お天守の、富姫御前の禿たち、変

化心備わつて、奥州第一の赭面に、びくともせぬは我折れ申す。——さて、更めて

内方へ、ものも、案内を頼みましょう。

女童三 屋根から入った小父さんはえ？

朱の盤 これはまた御挨拶だ。ただ、猪苗代から参つたと、さき、取次、取次。

女童一 知らん。

女童三 べいい。（赤べろする。）

朱の盤　これは、いかな事——（立直る。大音に）ものも案内。

薄　どうれ。（壁より出迎う）いずれから。

朱の盤　これは岩代国会津郡十文字ヶ原青五輪のあたりに罷在る、奥州変化の先達、

允殿館のあるじ朱の盤坊でござる。すなわち猪苗代の城、亀姫君の御供をいたし罷

出ました。当お天守富姫様へ御取次を願いたい。

薄　お供御苦労に存じ上げます。あなた、お姫様は。

朱の盤　（真仰向けに承塵を仰ぐ）屋の棟に、すでに輿をばお控えなさるる。

薄　夫人も、お待兼ねでございます。

手を敲く。音につれて、侍女三人出づ。齊しく手をつく。

早や、御入らせ下さりませ。

朱の盤　（空へ云う）輿傍へ申す。此方にもお待うけじや。——姫君、これへお入りの

よう、舌長姥、取次がつせえ。

階子の上より、真先に、切禿の女童、うつくしき手鞆を両袖に捧げて出づ。

亀姫、振袖、襦袢、文金の高髻、扇子を手にす。また女童、うしろに守刀を

捧ぐ。あと庄えに舌長姥、古びて黄ばめる練衣、褪せたる紅の袴にて従い来る。

天守夫人、侍女を従え出で、設けの座に着く。

薄 (そと亀姫を仰ぐ) お姫様。
ひいさま

出むかえたる侍女等、皆ひれ伏す。

亀姫 お許し。

しとやかに通り座につく。と、夫人と面を合すとともに、双方よりひたと褥の膝を寄す。

夫人 (親しげに微笑む) お亀様。
ほほえ

亀姫 お姉様、おなつかしい。
あねえさま

夫人 私もお可懐い。
なつかし

—— (間。)

女郎花 夫人。(と長煙管にて煙草を捧ぐ。
おくさま ながぎせる たばこ)

夫人 (取つて吸う。そのまま吸口を姫に渡す) この頃は、めしあがるそうだね。

亀姫 ええ、どちらも。(うけて、その煙草を吸いつつ、左の手にて杯の真似をす。)

夫人 困りましたねえ。(また打笑む。)

亀姫 ほほほ、貴女を旦那様にはいたすまいし。
あなた

夫人 憎らしい口だ。よく、それで、猪苗代から、この姫路まで——道中五百里はあろうねえ、……お年寄。

舌長姥 御意にござります。……海も山もさしわたしに、風でお運び遊ばすゆえに、半日路には足りませぬが、宿々しゆくじゆくを歩ひろいましたら、五百里……されば五百三十里、もそつともござりましょうぞ。

夫人 ああね。(亀姫に)よく、それで、手鞠をつきに、わざわざここまでおいでだね。

亀姫 でございますから、お姉様あねえさまは、私がお可愛うかわゆございましょう。

夫人 いいえ、お憎らしい。

亀姫 御勝手。(扇子を落す。)

夫人 やつぱりお可愛い。(その背を抱き、見返して、姫に附添える女童に)どれ、お見せ。(手鞠を取る)まあ、綺麗な、私にも持って来て下されば可よいものを。

朱の盤 ははッ。(その白布の包を出し)姫君より、貴女様へ、お心入れの土産がこれに申すは、差出がましゆうござるなれど、これは格別、奥方様の思おぼしめ召しにかないますよ。…何と、姫君。(色を伺う。)

亀姫 ああ、お開き。お姉様の許とこだから、遠慮はない。

夫人 それはそれは、お嬉しい。が、お亀様は人が悪い、中は磐梯山の峰の煙か、虚
空蔵ぞうの人魂ひとたまではないかい。

亀姫 似たもの。ほほほほほ。

夫人 要りません、そんなもの。

亀姫 上げません。

朱の盤 いやまず、（手を挙げて制す）おなかがよくてお争い、お言葉の花が蝶のように
飛びまして、お美しい事でござる。……さて、此方こなたより申す儀ではなけれども、奥方様、
この品ばかりはお可厭いやではござるまい。

包を開く、首桶くびおけ。中より、色白き男の生首を出し、もとどりを掴つかんで、ずうんと据
う。

や、不重宝ぶちようほう、途中揺溢ゆりこぼいて、これは汗あせが出ました。（その首、血だらけ）これ、姥うば
殿、姥殿。

舌長姥 あいあい、あいあい。

朱の盤 御進物が汚れたわ。鱗うろこの落ちた鱸すずきの鰭ひれを真水で洗う、手の悪い魚売人には似たれ
ども、その儀では決してない。姥殿、此方こなた、一拭ひとぬぐい、清めた上で進ぜまいかの。

夫人（煙管を手にしき、面正しく吃と視て）氣遣いには及びません、血だらけなは、なおおいしからう。

舌長姥 こぼれた羹は、埃溜の汁でござるわの、お塩梅には寄りませぬ。汚穢や、見た目に、汚穢や。どれどれ掃除して参らしようぞ。（紅の袴にて膝行り出で、桶を皴手にひしと圧え、白髪を、ざつと捌き、染めたる齒を角に開け、三尺ばかりの長き舌にて生首の顔の血をなめる）汚穢や、（ペロペロ）汚穢やの。（ペロペロ）汚穢やの、汚穢やの、ああ、甘味やの、汚穢やの、ああ、汚穢いぞの、やれ、甘味いぞのう。

朱の盤（慌しく遮る）やあ、姥さん、齒を当てまい、御馳走が減りはせぬか。

舌長姥 何のいの。（ぐつたりと衣紋を抜く）取る年の可恐しき、近頃は齒が悪うて、人間の首や、沢庵の尻尾はの、かくやにせねば咽喉へは通らぬ。そのままの形では、金花糖の鯛でさえ、横嚙りにはならぬ事よ。

朱の盤 後生らしい事を言うまい、彼岸は過ぎたぞ。——いや、奥方様、この姥が件の舌にて舐めますると、鳥獸も人間も、とろとろと消えて骨ばかりになりますわ。……そりやこそ、申さぬことではなかつた。お土産の顔つきが、時の間に、細長うなりました。なれども、過失の功名、死んで変りました人相が、かえって、もとの面体に戻

りました。……姫君も御覽ぜい。

亀姫（扇子を顔に、透かし見る）ああ、ほんになあ。

侍女等一同、瞬きもせず熟と視る。誰も一口食べたそう。

薄 お前様——あの、皆さんも御覽なさいまし、亀姫様お持たせのこの首は、もし、この

姫路の城の殿様の顔に、よく似ているではござんせぬか。

桔梗 真に、瓜二つでございますねえ。

夫人（打 頷く）お亀様、このお土産は、これは、たしか……

亀姫 はい、私が廂を貸す、猪苗代亀ヶ城の主、武田衛門之介の首でございますよ。

夫人 まあ、貴女。（間）私のために、そんな事を。

亀姫 構いません、それに、私がいたしたとは、誰も知りはしませんもの。私が城を出ま

す時はね、まだこの衛門之介はお妾の膝に凭掛つて、酒を飲んでおりました。お大名

の癖に意地が汚くつてね、鯉汁を一口に食べますとね、魚の腸に針があつて、それが、

咽喉へささつて、それで亡くなるのでございますから、今頃ちようどそのお膳が出たぐ

らいでございますよ。（ふと驚く。扇子を落す）まあ、うっかりして、この咽喉に針が

ある。（もとどりを取つて上ぐ）大変なことをした、お姉様に刺さったらどうしよ

う。

夫人 しばらく！ 折角、あなたのお土産を、いま、それをお抜きだと、衛門之介も針が抜けて、蘇返よみがえつてしまいましたよう。

朱の盤 いかさまな。

夫人 私が気をつけます。可ようござんす。(扇子を添えて首を受取る) お前たち、瓜を二つは知れたこと、この人はね、この姫路の城の主、播磨守とは、血を分けた兄弟よ。

侍女等目と目を見合わす。

ちよつと、獅子にお供え申そう。

みづから、獅子頭の前に供う。獅子、その牙きばを開き、首を呑のむ。首、その口に隠る。

亀姫 (熟じつと視みる) お姉あねえさま様、お羨うらやましい。

夫人 え。

亀姫 旦那様が、おいで遊ばす。

間。——夫人、姫と顔を合す、互かんじに莞爾わんじとす。

夫人 嘘まことが真まことに。……お互まことに……

亀姫 何の不足はないけれど、

夫人　こんな男が欲しいねえ。——ああ、男と云えば、お亀様、あなたに見せるものがある。
——桔梗さん。

桔梗　はい。

夫人　あれを、ちよつと。

桔梗　畏まりました。（立つ。）

朱の盤　（不意に）や、姥殿、獅子のお頭に見惚れまい。尾籠千万。

舌長姥　（時に、うしろ向きに乗出して、獅子頭を視めつつあり）老人じゃ、当館奥方

様も御許され。見惚れるに無理はないわいの。

朱の盤　いやさ、見惚れるに仔細はないが、姥殿、姥殿はそこに居て舌が届く。（苦笑）

笑す。）

舌長姥思わず正面にその口を蔽う。侍女等忍びやかに皆笑う。桔梗、鋏形打つたる

五枚鋏、金の竜頭の兜を捧げて出づ。夫人と亀姫の前に置く。

夫人　貴女、この兜はね、この城の、播磨守が、先祖代々の家の宝で、十七の奥蔵に、

五枚鋏に九ツの錠を下して、大切に秘蔵をしておりますのをね、今日お見えの嬉しさに、

実は、貴女に上げましようと思つて取出しておきました。けれども、御心入の貴女の

お土産で、私のお恥しくなりました。それだから、ただ思っただけの、申訳に、お目に掛けますばかり。

亀姫 いいえ、結構、まあ、お目覚しい。

夫人 差上げません。第一、あとで気がつきますとね、久しく蔵込しまいこんであつて、かび臭い。蘭麝らんじやの薫かおりも何にもしません。大阪城の落ちた時の、木村長門守の思切つたようなのだと可いけれど、……勝戦かちいくさのうしろの方で、矢玉の雨宿あまやどりをしていた、ぬくいのらしい。御覧なさい。

亀姫 (鉢金はちがねの輝く裏を返す) ほんに、討死をした兜ではありませんね。

夫人 だから、およしなさいまし、葛や、しばらくそこへ。

指図のまま、葛、その兜を獅子頭の傍かたえに置く。

お帰りまでに、きつとお気に入るものを調べて上げますよ。

亀姫 それよりか、お姉様あねえさま、早く、あのお約束の手鞠てまりを突ついて遊びましょうよ。

夫人 ああ、遊びましょう。——あちらへ。——城の主人あるじの鷹狩が、雨風に追われ追われて、もうやがて大手さきに帰る時分、貴女は沢山たんお声がいいから、この天守から美しい声が響くと、また立騒うるさいでお煩わづらい。

亀姫のかしずきたち、皆立ちかかる。

いや、御先達、お山伏は、女たちとここで一献お汲みがよいよ。

朱の盤 吉祥天女、御功德でござる。(肱を張つて叩頭す。)

亀姫 ああ、姥、お前も大事な、ここに居てお相伴をしや。——お姉様に、私から我儘をしますから。

夫人 もつともさ。

舌長姥 もし、通草、山ぐみ、山葡萄、手造りの猿の酒、山蜂の蜜、蟻の甘露、諸白も

ござります、が、お二人様のお手鞠は、唄を聞きますばかりでも寿命の薬と承る。かよ
うに年を取りますと、慾も、得も、はは、覚えませぬ。ただもう、長生がしとうござ
りましてのう。

朱の盤 や、姥殿、その上のまた慾があるかい。

舌長姥 憎まれ山伏、これ、帰り途に舐められさつしやるな。(とペろりと舌。)

朱の盤 (頭を抱う) わあ、助けてくれ、角が縮まる。

侍女たち笑う。

舌長姥 さ、お供をいたしましょうの。

夫人を先に、亀姫、薄と女の童等、皆行く。五人の侍女と朱の盤あり。

桔梗 お先達、さあさあ、お寛ぎなさいまし。

朱の盤 寛がいで何とする。やあ、えいとな。

菘 もし、面白いお話を聞かして下さいましな。

朱の盤 聞かさいで何とする。(扇を笏に) それ、山伏と言つば山伏なり。兜巾と云つば

兜巾なり。お腰元と言つば美人なり。恋路と言つば闇夜なり。野道山路厭いとなく、修

行積それがしんだる某が、このいら高の数珠じゆずに掛け、いで一祈り祈るならば、などか利験りげんのなか

るべき。橋の下の菖蒲しょうぶは、誰が植えた菖蒲ぞ、ぼろぼん、ぼろぼん、ぼろぼんのぼろ

ぼん。

侍女等わざとはらはらと逃ぐ、朱の盤五人を追廻す。

ぼろぼんぼろぼん、ぼろぼんぼろぼん。(やがて侍女に突かれてどうと倒る) などか利験

のなかるべき。

葛 利験はござんしょうけれどな、そんな話は面白うござんせぬ。

朱の盤 (首を振って) ぼろぼん、ぼろぼん。

鞠唄聞ゆ。

——私が姉さん三人ござる、一人姉さん鼓が上手。

一人姉さん太鼓が上手。

いっちよいのが下谷にござる。

下谷一番達しやでござる。二両で帯買うて、

三両で括けて、括けめ括けめに七総さげて、

折りめ折りめに、いろはと書いて。——

葛 さあ、お先達、よしの葉の、よい女郎衆ではござんせぬが、参ってお酌。(扇を開く)

朱の盤 ぼろぼんぼろぼん。(同じく扇子にうく)おとととと、ちようどあるちようどある。いで、お肴を所望しよう。……などか利験のなかるべき。

桔梗 その利験ならござんしよう。女郎花さん、撫子さん、ちよつと、お立ちなさいまし。
両女立つ。

ここをどこぞと、もし人問わば、ここは駿河の
府中の宿よ、人に情を掛川の宿よ。雉子の雌鳥

ほろりと落いて、打ちきせて、しめて、しよのしよの

いとしよの、そぞろいとしゆうて、遣瀬なや。

朱の盤 やんややんや。

女郎花 今度はお先達、さあ。

葛 貴方あなたがお立ちなさいまし。

朱の盤 ぼろぼん、ぼろぼん。此方衆思こなたおもいざしを受きようならば。

侍女五人扇子を開く、朱の盤杯を一順す。すなわち立つ。腰なる太刀をすらりと抜き、

以前の兜を切きつさき先にかけて、衝つと天井に翳かげし、高脛たかすねに拍子を踏んで――

戈鋌かせんけんげき劍戟けんげきを降らすこと電光の如くなり。

盤ばんじやくいわお石巖いしわおを飛ばすこと春の雨に相同じ。

然しかりとはいえども、天帝の身には近づかで、

修羅かれがために破らる。

――お立ち――、(陰より諸声もろごえ)

手早く太刀を納め、兜をもとに直す、一同つい居る。

亀姫 お姉あねえさま様、今度は貴方が、私へ。

夫人 はい。

舌長姥 お早々と。

夫人 (領きつつ、連れて廻廊にかかる。目の下遥に瞰下す) ああ、鷹狩が帰って来た。

亀姫 (ともに、瞰下す) 先刻私が参る時は、蟻のような行列が、その鉄砲で、松並木を走っていました。ああ、首に似た殿様が、馬に乗って反返って、威張って、本丸へ入って来ますね。

夫人 播磨守さ。

亀姫 まあ、翼の、白い羽の雪のような、いい鷹を持っているよ。

夫人 おお。(軽く胸を打つ) 貴女。(間)あの鷹を取って上げましょうね。

亀姫 まあ、どうしてあれを。

夫人 見ておいで、それは姫路の、富だもの。

蓑を取って肩に装う、美しき胡蝶の群、ひとしく蓑に舞う。颯と翼を開く風情す。それ、人間の目には、羽衣を被た鶴に見える。

ひらりと落す特、一羽の白鷹颯と飛んで天守に上るを、手に捕う。

——わつと云う声、地より響く——

亀姫 お涼しい、お姉様。

夫人 この鷹ならば、鞆を投げてもとりましょう。——沢山お遊びなさいまし。

亀姫 あい。（嬉しげに袖に抱く。そのまま、真先に階子を上げる。二三段、と振り返りて、衝と鷹を雪の手に据うるや否や）虫が来た。

云うとともに、袖を払って一筋の征矢をカラリと落す。矢は鷹狩の中より射掛けたるなり。

夫人（齊しくともに）む。（と肩をかわし、身を捻って背向になる、舞台に面を返す時、口に一条の征矢、手にまた一条の矢を取る。下より射たるを受けたるなり）推参な。

——たちまち鉄砲の音、あまたたび——

薄 それ、皆さん。

侍女等、身を垣にす。

朱の盤 姥殿、確り。（姫を庇うて大手を開く。）

亀姫 大事な、大事な。

夫人（打笑む）ほほほ、皆が花火線香をお焚き——そうすると、鉄砲の火で、この天守が燃えると思つて、吃驚して打たなくなるから。

——舞台やや暗し。鉄砲の音止む——

夫人、亀姫と声を合せて笑う、ほほほほほ。

夫人 それ、御覧、ついでにその火で、焼けそうな処を二三処焚くが可い、お亀様の路の
 松明たいまつにしようから。

舞台暗し。

亀姫 お心づくしお嬉しや。さらば。

夫人 さらばや。

寂寞せきぱく、やがて燈火ともしびの影に、うつくしき夫人の姿。舞台にただ一人のみ見ゆ。夫人
 うしろむきにて、獅子頭しじうに対し、机しづかに向い巻ものを読みつつあり。間まを置き、女郎花、
 清らかなる小搔卷こがいまきを持ち出で、静しずかに夫人の背せなに置き、手をつかえて、のち去る。――

ここはどここの細道じや、細道じや。

天神様の細道じや、細道じや。

舞台一方の片隅に、下の四重に通ずべき階子の口あり。その口より、まず一の雪洞ひとつ ほんぼり
 頭あちわれ、一廻りあたりを照す。やがて衝つと鬘かざすとともに、美丈夫、秀でたる眉に勇壮の
 氣満つ。黒羽二重の紋着もんつき、萌黄もえぎの袴はかま、臘鞆ろうぼやの大小にて、姫川ずしよのすけ凶書之助登場。唄をき

きつつ低徊し、天井を仰ぎ、廻廊を窺い、やがて燈の影を視て、やや驚く。ついできちよう
几帳を認む。彼が入るべき方に几帳を立つ。図書は躊躇の後決然として進む。
瞳を定めて、夫人の姿を認む。剣夾に手を掛け、気構えたるが、じりじりと退る。

夫人 (間) 誰。

図書 はっ。(と思わず膝を支く) 某。

夫人 (面のみ振向く、——無言。)

図書 私は、当城の太守に仕うる、武士の一人でございます。

夫人 何しに見えた。

図書 百年以来、二重三重までは格別、当お天守五重までは、生あるもの参った例はありませぬ。今宵、大殿の仰せに依つて、私、見届けに参りました。

夫人 それだけの事か。

図書 且つまた、大殿様、御秘蔵の、日本一の鷹がそれまして、お天守のこのあたりへ隠れました。行方を求めよとの御意でございます。

夫人 翼あるものは、人間ほど不自由ではない。千里、五百里、勝手な処へ飛ぶ、とお言いなさるが可い。——用はそれだけか。

図書 別に余の儀は承りませぬ。

夫人 五重に参つて、見届けた上、いかが計らえとも言われなかつたか。

図書 いや、承りませぬ。

夫人 そして、お前も、こう見届けた上に、どうしようとも思ひませぬか。

図書 お天守は、殿様のもののでございます。いかなる事がありましようとも、私わたくし一存にて、何と計らおうとも決して存じませぬ。

夫人 お待ち。この天守は私のものだよ。

図書 それは、貴方あなたのものかも知れませぬ。また殿様は殿様で、御自分のものだど御意遊

ばすかも知れませぬ。しかし、いずれにいたせ、私わたくしのものでないことは確たしかでございます。自分のものでないものを、殿様の仰せも待たずに、どうしようとも思ひませぬ。

夫人 すずしい言葉だね、その心なれば、ここを無事で帰られよう。私も無事に帰してあげます。

図書 冥加みよがに存じます。

夫人 今度は、播磨が申しきけても、決して来てはなりません。ここは人間の来る処ではないのだから。——また誰も参らぬように。

図書 いや、私が参らぬ以上は、五十万石の御家中、誰一人参りますものはございませぬ。皆生命いのちが大切でございませぬから。

夫人 お前は、そして、生命は欲しゅうなかつたのか。

図書 私わたくしは、仔細しさいあつて、殿様の御不興を受け、お目通めどおりを遠ざけられ閉門の処、誰もお

天守へ上あがりますものがないために、急にお呼出しでございませぬ。その御上使は、実は私わたくしに切腹仰せつけの処を、急に御模様がえになつたのでございませぬ。

夫人 では、この役目が済めば、切腹は許されますか。

図書 そのお約束でございませぬ。

夫人 人の生いきしに死は構いませぬが、切腹はさしたくない。私は武士の切腹は嫌いだから。

しかし、思い掛がけなく、お前の生命いのちを助けました。……悪い事ではない。今夜はいい夜よだ。それではお帰り。

図書 姫君。

夫人 まだ、居ますか。

図書 は、恐入つたる次第ではございませぬが、御姿を見ました事を、主人に申まして差支えはございませぬか。

夫人 確にお言いなさいまし。留守でなければ、いつでも居るから。

凶書 武士の面目に存じます——御免。

雪洞を取つて静に退座す。夫人長煙管を取つて、払く音に、凶書板敷にて一度留まり、直ちに階子の口にて、燈を下に、壇に隠る。

鐘の音。

時に一体の大入道、面も法衣も真黒なるが、もの陰より藁を渡り梢を伝うがごとくにして、舞台の片隅を伝い行き、花道なる切穴の口に踞まる。

鐘の音。

凶書、その切穴より立顕る。

夫人すつと座を立ち、正面、鼓の緒の欄干に立ち熟と視る時、凶書、雪洞を翳して高く天守を見返す、トタンに大入道さし覗きざまに雪洞をふつと消す。凶書身構す。大入道、大手を拡げてその前途を遮る。

鐘の音。

侍女等、凜々しき扮装、揚幕より、懐剣、薙刀を構えて出づ。凶書扇子を抜持ち、大入道を払い、懐剣に身を躲し、薙刀と丁と合わす。かくて一同を追込み、揚幕際に

扇を揚げ、屹と天守を仰ぐ。

鐘の音。

夫人、従容として座に返る。図書、手探りつつもとの切穴を捜る。(間)その切穴に没す。しばらくして舞台なる以前の階子の口より出づ。猶予わず夫人に近づき、手をつく。

夫人 (先んじて声を掛く。穩に) また見えたか。

図書 はつ、夜陰と申し、再度御左右を騒がせ、まことに恐入りました。

夫人 何しに来ました。

図書 御天守の三階中壇まで戻りますと、鳶ばかり大きさの、野衾かと存じます、大蝙蝠の黒い翼に、燈を煽ぎ消されまして、いかにとも、進退度を失いましたにより、灯を頂きに参りました。

夫人 ただそれだけの事に。……二度とおいででないと申した、私の言葉を忘れましたか。図書 針ばかり片割月の影もささず、下に向えば真の暗黒。男が、足を踏みはずし、壇を転がり落ちまして、不具になどなりましては、生効もないと存じます。上を見れば五重のここより、幽にお燈がさしました。お咎めをもつて生命をめさりようとも、男と

いたし、階子から落ちて怪我をするよりはと存じ、御戒をも憚らず推参いたしてございます。

夫人（莞爾と笑む）ああ、爽かなお心、そして、貴方はお勇しい。燈を点けて上げましょうね。（座を寄す。）

図書 いや、お手ずからは恐多い。私が。

夫人 いえいえ、この燈は、明星、北斗星、竜の燈、玉の光もおなじこと、お前の手では、蠟燭には点きません。

図書 ははッ。（瞳を凝す。）

夫人、世話めかしく、雪洞の蠟を抜き、短檠の灯を移す。燭をとつて、熟と図書の面を視る、恍惚とす。

夫人（蠟燭を手にしたるまま）帰したくなくなつた、もう帰すまいと私は思う。

図書 ええ。

夫人 貴方は、播磨が貴方に、切腹を申しつけたと言いました。それは何の罪でございませぬ。

図書 私が拳に据えました、殿様が日本一とて御秘蔵の、白い鷹を、このお天守へ逸しま

した、その越度、その罪過でございます。

夫人 何、鷹をそらした、その越度、その罪過、ああ人間というものは不思議な咎を被せるものだね。その鷹は貴方が勝手に鳥に合せたものではありませんまい。天守の棟に、世にも美しい鳥を視て、それが欲しさに、播磨守が、自分で貴方にいつけて、勝手に自分でそらしたものを、貴方の罪にしますのかい。

図書 主と家来でございます。仰せのまま生命をさし出しますのが臣たる道でございます。夫人 その道は曲つていきましょう。間違つたいいつけに従うのは、主人に間違つた道を踏ませるものではありませんか。

図書 けれども、鷹がそれました。

夫人 ああ、主従とかは可恐しい。鷹とあの人間の生命とを取かえるのでございますか。よしそれも、貴方が、貴方の過失なら、君と臣というもののそれが道なら仕方がない。けれども、播磨がさしずなら、それは播磨の過失というもの。第一、鷹を失つたのは、貴方ではありません。あれは私に取りました。

図書 やあ、貴方が。

夫人 まことに。

図書 ええ、お怨み申上ぐる。(刀に手を掛く。)

夫人 鷹は第一、誰のものだと思いません。鷹には鷹の世界がある。露霜の清い林、朝嵐夕風の爽かな空があります。決して人間の持ちものではありません。諸侯などというものが、思上った行過ぎな、あの、鷹を、ただ一人じめに自分のものと、つけ上りがしていません。貴方はそうは思いませんか。

図書 (沈思す、間) 美しく、気高い、そして計り知られぬ威のある、姫君。——貴方にはお答が出来かねます。

夫人 いえ、いえ、かどだてて言籠めるではありません。私の申すことが、少しなりともお分りになりましたら、あのその筋道の分らない二三の丸、本丸、太閤丸、廓内、御家中の世間へなど、もうお帰りなさいますな。白銀、黄金、球、珊瑚、千石万石の知行より、私が身を捧げます。腹を切らせる殿様のかわりに、私の心を差上げます、私の生命を上げましょう。貴方お帰りなさいますな。

図書 迷いました、姫君。殿に金鉄の我が心も、波打つばかり悩乱をいたします。が、決心が出来ません。私は親にも聞きたし、師にも教えられたし、書もつにも聞かかねばなりません。お暇を申上げます。

夫人（歎息す）ああ、まだ貴方は、世の中に未練がある。それではお帰りなさいまし。

（この時蠟燭を雪洞に）はい。

図書 途方に暮れつつ参ります。迷の多い人間を、あわれとばかり思召せ。

夫人 ああ、優しいそのお言葉で、なお帰したくなくなつた。（袂を取る。）

図書（屹として袖を払う）強いて、たつて、お帰しなくば、お抵抗をいたします。

夫人（微笑み）あの私に。

図書 おんでもない事。

夫人 まあ、お勇ましい、凛々しい。あの、獅子に似た若いお方、お名が聞きたい。

図書 夢のような仰せなれば、名のありなしも覚えませぬが、姫川図書之助と申します。

夫人 可懐い、嬉しいお名、忘れません。

図書 以後、お天守下の往かいには、誓つて礼拝をいたします。——御免。（衝と立つ。）

夫人 ああ、図書様、しばらく。

図書 是非もない、所詮活けてはお帰しない掟なのでございますか。

夫人 ほほほ、播磨守の家中とは違います。ここは私の心一つ、掟などは何にもない。

図書 それを、お呼留め遊ばしたは。

夫人 おはなむけがあるのでござんす。——人間は疑深い。卑怯な、臆病な、我儘な、殿様などはなおの事。貴方がこの五重へ上って、この私を認めたことを誰もほんとうにはせぬであろう。清い、爽かな貴方のために、記念の品をあげましょう。(静かに以前の兜を取る)——これを、その記念にお持ちなさいまし。

図書 存じも寄らぬ御たまもの、姫君に向い、御辞退はかえって失礼。余り尊い、天晴な御兜。

夫人 金銀は堆けれど、そんなにいい細工ではありません。しかし、武田には大切な道具。——貴方、見覚えがありますか。

図書 (疑の目を凝しつつあり) まさかとは存ずるなり、私とても年に一度、虫干の外には拝しませぬが、ようも似ました、お家の重宝、青竜の御兜。

夫人 まったく、それに違いありません。

図書 (愕然とす。急に) これにこそ足の爪立つばかり、心急ぎがいたします、御暇を申うけます。

夫人 今度来ると帰しません。

図書 誓つて、——仰せまでもありません。

夫人 さらば。

図書 はつ。(兜を捧げ、やや急いで階子はしごに隠る。)

夫人 (ひとりもの思い、机に頬杖ほおづえつき、獅子にももの言う) 貴方、あの方を——私わたくしに下さいまし。

薄 (静に出づ) お前様。

夫人 薄か。

薄 立派な方でございます。

夫人 今まで、あの人を知らなかった、目の及ばなかった私は恥かしいよ。

薄 かねてのお望みに叶かのうた方を、何でお帰しなさいました。

夫人 生命いのちが欲しい。抵抗てむかいをすると云うもの。

薄 御一所に、ここにお置き遊ばすまで、何の、生命いのちをお取り遊ばすのではございませぬのに。

夫人 あの人たちの目から見ると、ここに居るのは活いきたものではないのだと思います。

薄 それでは、貴方の御容色ごきりようと、そのお力で、無理にもお引留よめが可ようございますのに。何の、抵抗てむかいをしました処で。

夫人 いや、容色きりようはこちらからは見せたくない。力で、人を強いるのは、播磨守なんぞの事、真まことの恋は、心と心、……（軽く）薄や。

薄は。

夫人 しかし、そうは云うものの、白鷹を据えた、鷹たかじょう匠だと申すよ。——縁ぐちだねえ。

薄 きつと御縁がござりますよ。

夫人 私もどうやら、そう思うよ。

薄 奥様、いくら貴女のお言葉でも、これはちと痛いたみ入りました。

夫人 私も痛入りました。

薄 これはまた御挨拶でござります——あれ、何やら、御天守下が騒がしい。（立つて欄干に出づ、遥はるかに下を覗のぞ込む）……まあ、御覧なさいまし。

夫人 （座のまま）何だえ。

薄 武士が大勢で、篝かがりを焚たいております。ああ、武田播磨守殿、御出張、床しょうぎ几かかに掛かつてお控えだ。おぬるくて、のろい癖に、もの見高な、せっかちで、お天守見届けのお使いの帰るのを待兼ねて、推おし出したのでござります。もしえもしえ、凶書様のお姿が小さく見えます。奥様、おたまじやくしの真ま中なかで、御紋ごもん着つきの御紋も河骨こうぼね、すつきり花が

咲いたような、水際立つてお美しい。……奥様。

夫人 知らないよ。

薄 おお、兜あらためがはじまりました。おや、吃驚びっくりした。あの、殿様の漆みたいな太い眉毛が、びくびくと動きますこと。先刻さつきの亀姫様のお土産の、兄弟の、あの首を見せたら、どうぞごさいましょう。ああ、御家老が居ます。あの親仁おやじも大分百姓を痛めて溜た込みましたね。そのかわり頭が兀はげた。まあ、皆みんなが図書様を取巻いて、お手柄にあやかるのかしら。おや、追取おつとり刀だ。何、何、何、まあ、まあ、奥様々々。

夫人 もう可い。

薄 ええ、もう可いではございません。図書様を賊だ、と言います。御秘蔵の兜を盗んだ謀逆むほんにん人、謀逆人、殿様のお首に手を掛けたも同然な逆賊でございますとき。お庇かかげで兜が戻ったのに。——何てまあ、人間というものは。——あれ、捕手とりてが掛かつた。忠義と知行で、てむかいはなさらぬかしら。しめた、投げた、嬉しい。そこだ。御家老が肩衣かたぎぬを撥はねましたよ。大勢が抜連れた。あれ危い。豪えらい。図書様抜合せた。……一人腕うでが落ちた。あら、胴切どうぎり。また何も働かずとも可いことを、五両二人扶持ににんぶちらしいのが、あら、可哀相かわいそうに、首が飛びます。

夫人 秀吉時分から、見馴みなれていながら、何だねえ、騒さわ々しい。

薄 騒さわがずにはいられません。多勢たせいに一人、あら切抜けた、図書様がお天守てんしゆに遁にげ込みました。追掛おひかけますよ。檜ひのきまで持出した。(欄干らんかんをすすると) 図書様が、二重にじゆうへ駈かけ上あがつておいでなさいます。大勢たせいが追詰おひめて。

夫人 (片膝かたひざ立つ) 可よし、お手伝てんい申せ。

薄 お腰元衆こしもと、お腰元衆こしもと。——(呼びつつ忙せわしく階子はしごを下り行く。)

夫人、片手を掛かけつつ几帳きちょう越こに階子はしごの方かたを瞰みおろ下くだす。

——や、や、や、——激あしき人声ひとこゑ、もの音ね、足踏あしふみ。——

図書、もどりを放はなち、衣服いふくに血ちを浴ゆぶ。刀やいばを振ふるつて階子はしごの口くちに、一度いちど屹ぎつと下くだを見込みこむ。肩かたに波打なち、はつと息いきしてどうとなる。

夫人 図書様。

図書 (心づき、躑よろよろ躑よろよろと、且かつつ呼吸いきせいで急いそいで寄よる) 姫君ひめぎみ、お言葉ことばをも顧かへみず、三度さんどの推参おしんをお許ゆるし下さい。私わたくしを賊むす……賊むす……謀逆むほん人にん、逆賊ぎやくざくと申まをして。

夫人 よく存ぞんじておりますよ。昨日けふ今日けふ、今までも、お互たがひに友ともと呼よんだ人ひとたちが、いかに殿とのの仰おほせとて、手ての裏うらを反かえすように、ようまあ、あなたに刃やいばを向むかへます。

図書 はい、微塵みじんも知らない罪のために、人間同志に殺されましては、おなじ人間、断念あきらめられない。貴女あなたのお手に掛かります。——御禁制ごきんせいを破やぶりました、御約束を背そむきました、その罪に伏ふします。速すみに生命いのちをお取り下されたい。

夫人 ええ、武士さむらいたちの夥間なかもならば、貴方のお生命を取りましょう。私と一所には、いつまでもお活なきなさいまし。

図書 (急せきつつ) お情余なさける、お言葉ながら、活なきようとて、討手の奴やつぱら儕、決して活なしておきません。早くお手に掛かけ下くださいまし。貴女に生命を取らるれば、もうこの上のない本望、彼等に討うたるるのは口惜くちおしい。(夫人の膝に手を掛かく) さ、生命いのちを、生命を——こう云う中うちにも取詰とめて参ります。

夫人 いいえ、ここまでは来きますまい。

図書 五重の、その壇、その階子を、鼠のごとく、上ありつ下くだりついたしおる。……かねての風説、鬼神おにがみより、魔まよりも、ここを恐おそしと存ぞんじておるゆえ、いささか躊躇ちゆうちよはいたしますが、既すでに、私わたくしの、かく参まつたを、認まめております。こう云う中にも、たつた今、夫人 ああ、それもそう、何なにより前まへに、貴方をおかくまい申しておこう。(獅子頭を取る、母衣ほろを開いて、図書の上に蔽おほいながら) この中へ……この中へ——

凶書 や、金城鉄壁。

夫人 いいえ、柔い。

凶書 仰おおせの通り、真綿よりも。

夫人 そして、確しつかり、私におつかまりなさいまし。

凶書 失礼御免。

夫人の背せなよりその袖すがに縋すがる。縋すがる、と見えて、身体からだその母衣すその裾すそなる方かたにかくる。獅子頭しじうを捧たげつつ、夫人の面おもて、なお母衣すその外そとに見ゆ。

討手うでどやどやと入いりこ込み、と見てわつと一度退ひく時、夫人も母衣すそに隠かくる。ただ一頭青面いっとうせいめんの獅子しじう猛然まげんとして舞台ぶたいにあり。

討手うで。小田原修理しゆり、山隅くへい九平くへい、その他その他。拔身ぬきみの槍やり、刀やいば。中には仰山おうえんに小具足せうぐそくをつけたるもあり。大勢おほし。

九平くへい (雪洞ゆきどうを寄よす) やあ、怪あやしく、凄すこく、美うしい、婦おんなの立姿たちすがたと見えたはこれだ。

修理しゆり 化ばるわ化ばるわ。御城ごじやうの瑞ずい兆ちやう、天人てんじんのごとき鶴つるを御覧ごらんあつて、殿様てんやう、鷹たかを合せたまえば、鷹たかはそれで破やれみの蓑みを投落なす、……言語道断げんごだうたん。

九平くへい 他ほかにない、姫川ひめがわ凶書きゆうしよめ、死しにものぐるいに、確たしかにそれなる獅子母衣しじうぼいに潜かづつたに相違さういな

し。やあ、上意だ、逆賊出合え。山隅九平向うたり。

修理 待て、山隅、先方で潜つた奴だ。呼んだつて出やしない。取つて押え、引摺出せ。
九平 それ、面々。

修理 氣を着けい、うかつにかかると怪我をいたす。元來この青獅子が、並大抵のものではないのだ。伝え聞く。な、以前これは御城下はずれ、群鷺山の地主神の宮に飾つ

てあつた。二代以前の当城殿様、お鷹狩の馬上から——一人町里には思いも寄らぬ、
都方と見えて、世にも艶麗な女の、一行を颯と避けて、その宮へかくれたのを——

——とろんこの目で御覧じたわ。此方は鷹狩、もみじ山だが、いずれ戦に負けた国の、上
藤、貴女、貴夫人たちの落人だろう。絶世の美女だ。しやつ掴出して奉れ、

とある。御近習、宮の中へ闖入し、人妻なればと、いなむを捕えて、手取足取しよ
うとしたれば、舌を嚙んで真俯向けに倒れて死んだ。その時にな、この獅子頭を熟と視
て、あわれ獅子や、名誉の作かな。わらわにかばかりの力あらば、虎狼の手にかか
りはせじ、と吐いた、とな。続いて三年、毎年、秋の大洪水よ。何が、死骸取片づけの
山神主が見た、と申すには、獅子が頭を逆にして、その婦の血を舐め舐め、目から涙を
流いたというが触出しでな。打続く洪水は、その婦の怨だと、国中の是沙汰だ。婦が前

髪にさしたのが、死ぬ時、髪をこぼれ落ちたというを拾って来て、近習が復命をした、白木に刻んだ三輪牡丹高彫ぼたんたかぼりのさし櫛ぐしをな、その時の馬上の殿様は、澄すまして袂たもとへお入れなされた。崇たたりを恐れぬ荒氣の大名。おもしろい、水を出さば、天守の五重を浸ひたして見よ、とそれ、生捉いけどつて来てな、ここへ打上げたその獅子頭だ。以来、奇異妖ようへん変へんさながら魔所のように沙汰する天守、まさかとは思うたが、目まのあたり不思議を見るわ。——心してかかれ。

九平 心得た、槍をつける。

討手、槍にて立ちかかる。獅子狂う。討手辟へきえき易えきす。修理、九平等、拔連れ拔連れ一

同立たちかか掛かる。獅子狂う。また辟易へきえきす。

修理 木彫にも精がある。活いきた獣も同じ事だ。目めを狙ねらえ、目めを狙ねらえ。

九平、修理、力を合せて、一ひと刀たちずつ目めを傷きずつ、獅子伏す。討手その頭かしらをおさう。

図書 (母衣ほろを撥退はねのけ刀かを揮ふるつて出づ。口々に罵ののし討手と、一刀合ひとすと斉ひとしく) ああ、目が見えない。(押倒され、取つて伏せらる) 無念。

夫人 (獅子の頭をあげつつ、すつくと立つ。黒髪乱れて面凄おもすごし。手に以前の生首の、もどとりを取つて提ひぐ) 誰の首だ、お前たち、目のあるものは、よつく見よ。(どつしと

投ぐ。)

——討手わツと退き、修理、恐る恐るこれを拾う。

修理 南無三寶。
なむさんぼう

九平 殿様の首だ。播磨守様御首だ。
みしるし

修理 一大事とも言いようなし。御同役、お互に首はあるか。

九平 可おそろし恐い魔ものだ。うかうかして、こんな処に居べきでない。

討手一同、立つ足もなく、生首をかこいつつ、乱れて退く。

図書 姫君、どこにおいでなさいます。姫君。

夫人、悄しょうぜん然として、立ちたるまま、もの言わず。

図書 (あわれに寂しく手探り) 姫君、どこにおいでなさいます。私わたくしは目が見えなくなり

ました。姫君。

夫人 (忍び泣きに泣く) 貴方、私も目が見えなくなりました。

図書 ええ。

夫人 侍女こしもとたち、侍女たち。——せめては燈あかりを——

——皆、盲目めくらになりました。誰も目が見えませんでございます。——(口々に一同

はつと泣く声、壁の彼方に聞ゆ。）

夫人（獅子頭とともにハタと崩折る）獅子が両眼を傷つけられました。この精霊で活きましたものは、一人も見えなくなりました。凶書様、……どこに。

凶書 姫君、どこに。

さぐり寄りつつ、やがて手を触れ、はつと泣き、相抱く。

夫人 何と申そうようもない。貴方お覚悟をなさいます。今持たせてやった首も、天守を出れば消えましょう。討手は直ぐに引返して参ります。私一人は、雲に乘ります、風に飛びます、虹の橋も渡りません。凶書様には出来ません。ああ口惜い。あれら討手のもの目に、蓑笠着ても天人の二人揃った姿を見せて、日の出、月の出、夕日影にも、おがませようと思つたのに、私の方が盲目になつては、ただお生命さえ助けられない。堪忍して下さいまし。

凶書 くやみません！ 姫君、あなたのお手に掛けて下さい。

夫人 ええ、人手には掛けますまい。そのかわり私も生きてはおりません、お天守の塵、煤ともなれ、落葉になつて朽ちましよう。

凶書 やあ、何のために貴女が、美しい姫の、この世にながらえておわすを土産に、冥土

へ行くのでございます。

夫人 いいえ、私も本望でございませぬ、貴方のお手にかかるのが。

図書 真実のお声か、姫君。

夫人 ええ何の。——そうおつしやる、お顔が見たい、ただ一目。……千歳百歳にただ

一度、たった一度の恋なのに。

図書 ああ、私も、もう一目、あの、気高い、美しいお顔が見たい。（相縋る。）

夫人 前世も後世も要らないが、せめてこうして居とうござんす。

図書 や、天守下で叫んでいる。

夫人 （屹となる）口惜しい、もう、せめて一時隙があれば、夜叉ヶ池のお雪様、遠い

猪苗代の妹分に、手伝を頼もうものを。

図書 覚悟をしました。姫君、私を。……

夫人 私は貴方に未練がある。いいえ、助けたい未練がある。

図書 猶予をすると討手の奴、人間なかまに屠られます、貴女が手に掛けて下さらずば、

自分、我が手で。——（一刀を取直す。）

夫人 切腹はいけません。ああ、是非もない。それでは私が御介錯、舌を嚙切つてあげ

ましよう。それと一所に、胆きものたばねを——この私の胸を一思いに。

図書 せめてその、ものをおつしやる、貴方の、ほのかな、口許くちもとだけでも、見えたらばな。
夫人 貴方の睫毛まつげ一筋なりと。(声を立ててともに泣く。)

奥なる柱の中に、大音あり。——

——待て、泣くな泣くな。——

工人、近江おうみのじょう之丞とうろく桃六、六十むそじばかりの柔和なる老人。頭巾ずきん、裁着たっつけ、火打袋を腰

に、扇あわを使うて頭ある。

桃六 美しい人たち泣くな。(つかつかと寄つて獅子の頭かしらを撫なで)まず、目をあけて進ぜ

よう。

火打袋より一挺ちようの鑿のみを抜き、双の獅子の眼まなこに当あつ。

——夫人、図書とともに、あつと云う——

桃六 どうだ、の、それ、見えよう。はははは、ちゃんと開あいた。嬉しそうに開いた。お

お、もう笑うか。誰たがよ誰がよ、あつはつはつ。

夫人 お爺じいさん様。

図書 御老人、あなたは。

桃六 されば、誰かの櫛くしに牡丹ぼたんも刻めば、この獅子頭ししづも彫たつた、近江之丞おんえのじやう桃六と云う、丹波たんぱの国の楊枝ようじけずり削ずよ。

夫人 まあ、(函書と身を寄せたる姿を心づく) こんな姿を、恥かしい。

函書も、ともに母衣ほろを被かぎて姿を蔽おほう。

桃六 むむ、見える、恥しそうに見える、極きまりの悪そうに見える、がやっぱり嬉しそうに見える、はっはっはっはっ。睦むつまじいな、若いもの。(石を切つて、ほくちをのぞませ、煙管きせるを横よこぐわ銜たばこえに煙草を、すばすば) 気苦勞の拳句は休め、安らかに一寝ねいり入いさせえ。そのうちに、もそつと、その上にも清すずしい目にして進すすぜよう。

鑿のみを試む。月影さす。

そりや光がさす、月の光あれ、眼玉。(鑿を試み、小耳を傾け、鬨とぎのごとく叫ぶ天守下

の声を聞く)

世は戦いくさでも、胡蝶ちようが舞う、撫子なでしこも桔梗ききようも咲くぞ。——馬鹿ばかめが。(呵から々と笑う)

ここに獅子がいる。お祭礼まつりだと思つて騒さわげ。(鑿を当てつつ) 槍、刀、弓矢、鉄砲、城の奴等やつら。

大正六（一九一七）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

天守物語

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>